

僕を救った剣道

福島県

玉川剣友会

小学6年 青木隆成

「どうした、落ち着け。」しんと静まり返った体育館で先生に呼びかけられる。頭に浮かぶ言葉が声に出せない。早く言わないと、自分が号令しないとみんなが動けない。早く、早く。あせる気持ちで頭がぐるぐるし、心臓がバクバクと音を立てる。「ああ、やっぱりか。」

僕は人と話すことが苦手だ。自分の気持ちを話そうとするとどもってしまい、上手く言葉を話せない時がある。「え、何、大丈夫。」と聞き返されることも多く、その度に自分が責められているような気持ちになる。落ち着いてゆっくり話せばいいよと言われるが、

「うまく話せなかったらどうしよう、笑われるんじゃないか。」という不安や恐怖で人と話す時はいつも緊張していた。

そんな僕が、言葉が無くても人と関わることができたのが剣道だ。交剣知愛という言葉があるように、一度一緒にけい古をした仲間とは言葉が無くても、心でつながることができる。一緒に辛いけい古を乗り越え競い合う時間は、とても充実していて、自然と仲間が増えていく。幼い頃から剣道は僕の一番の心の支えであり、親友のような存在だった。普段は自分の気持ちを表現するのが苦手な僕だが、剣道だけは自信を持って好きと言える。しかし、今までの僕は剣道が好きだという気持ちだけで明確な目標は持っていなかった。「どうして剣道をしているのか。続けた先でどうなりたいのか。」その答えが僕にはなかった。そんな僕が自分を変えるきっかけになったのが、六年生になりキャプテンを任されるようになったからだ。先生に次のキャプテンと指名された時、全身に緊張が走った。自分には出来ない。怖い。きっと失敗する。そんな気持ちで初めて号令する。何百回と聞いたはずの言葉が出せなかった。自分には無理だ。チームの仲間にも申し訳ないし、迷惑になってしまう。初めてけい古をいやだと思ってしまった。帰りの車の中で、「次のけい古で先生にキャプテンは

やりたくないって言おうかな。」とつぶやく。きっと、責任を持ってやりなさいと怒られる。そう思ったが、父からは、「やりたくないならそう言いなさい。でもな、今日のけい古中、号令ができないことを怒ったり笑う人がいたのか。キャプテンだからとあせらず、落ちついて、もっと周りをちゃんと見なきゃだめだよ。」そう言われた。

言葉が出なかった時、先生は「お前なら出来る。落ちついてやってみなさい。」と見守ってくれた。チームの仲間は、言葉が出ない僕をばかにしたり責めたりする人は一人も居なかった。その時は自分のことで精一杯で気付けなかったが、仲間の優しさがうれしかった。次のけい古では、ちゃんと出来なくても、かっこ悪くても、自信を持ってキャプテンをやろう。そう思い、言葉がうまく出せなくても大きな声を出すことを意識した。そんな自分についてきてくれる仲間の存在に助けられた。自分から行動を起こすことから逃げていた前の自分。今は、チームの為に何が出来るのか。チームみんなが強くなることを考えながらけい古にのぞんでいる。失敗しても支えてくれる仲間がいるから、今日も僕はキャプテンを頑張れる。僕は剣道を通じて沢山の仲間ができ、その存在は僕の自信となり、話すことへの恐怖から、一歩踏み出す勇気をくれる。今、僕と同じように、コミュニケーションに不安や悩みを持つ人が沢山いると思う。そんな人に僕は剣道をすすめたい。同じ目標に向かってけい古をする時間は、新しい仲間、そして新しい自分に出会わせてくれるからだ。

僕を救った剣道、それはどもることで、自分に自信が無かった事を忘れるくらい熱中できる存在だ。僕は剣道ができる嬉しさと、指導してくれる先生、一緒に剣道をする仲間、応援してくれる家族に感謝の気持ちを持って

「お互いに礼。」